

[認知症対応型共同生活介護用]

1. 評価結果概要表

作成日 平成21年2月26日

【評価実施概要】

事業所番号	267280063
法人名	社会福祉法人城陽福祉会
事業所名	グループホーム ひだまり
所在地	〒610-0101 京都府城陽市平川浜道裏29-5 (電話) 0774-54-7817

評価機関名	社団法人京都ボランティア協会		
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル海湊町83-1 ひと・まち交流館 京都1階		
訪問調査日	平成21年1月28日	評価確定日	平成21年3月7日

【情報提供票より】(平成 年 月 日事業所記入)

(1)組織概要

開設年月日	平成 20 年 5 月 1 日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	17 人	常勤 8 人, 非常勤 9 人, 常勤換算	12.5 人

(2)建物概要

建物構造	軽量鉄骨造り
	2階建ての 1階～ 2階部分

(3)利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	70,000 円	その他の経費(月額)	円	
敷金	有(円)	〇無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円) 〇無	有りの場合 償却の有無	償却有	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または 1日あたり 1670円			

(4)利用者の概要(1 月 10 日現在)

利用者人数	16 名	男性	4 名	女性	12 名
要介護1	4 名	要介護2	6 名		
要介護3	3 名	要介護4	1 名		
要介護5	0 名	要支援2	1 名		
年齢	平均 85.9 歳	最低	80 歳	最高	96 歳

(5)協力医療機関

協力医療機関名	京都市づ川病院
---------	---------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

法人は保育園から始め、30年の歴史を持ち、10年前に特養を開設し、初めてのグループホームが当事業所である。城陽市の北部、中学校に隣接し、周りに畑や田んぼが広がる静かな地域である。敷地内には芝生や畑等があり、プランターに花が植えられている。1年間の準備期間があり、便座の高さや個浴など、特養の経験がハードに生かされている。地域や家族との関係は良好である。ホーム長、管理者、ケアマネジャーを中心に20歳代～60歳代までの17人の職員はチームワークが良い。職員の前職は自衛官、花屋、バス会社、病院、障害者施設等、非常に幅広く、家族介護の経験者等もあり、利用者への豊かな対応になっている。食事と外出、受診同行による医師との連携に力を入れている。「プチホテルひだまりのホテルマンとして、卑下しないでプライドをもって働こう。将来自分がグループホームを開設するつもりで利用者に接してほしい」とホーム長は職員に言っている。開設1年で基礎作りができています。

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	<p>今回は第1回目の受審である。</p> <p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>今回の評価にあたって、自己評価を職員全員が行っている。自己評価をじっくり進めることによって、職員の評価に対する理解が深まり、サービスの質の向上の意識が高まっている。</p>
重点項目②	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>要綱があり、利用者、家族、自治会会長代理、民生委員、城陽市介護高齢課、地域包括支援センター職員がメンバーとなり、2か月に1回開催され、詳細な議事録が残されている。ホームからはオープンに情報を報告し、メンバーがそれぞれの立場から発言され、ホームとの良い関係づくりが進んでいる、欠席者には広報誌とともに議事録を送付している。</p>
重点項目③	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>夏祭りや餅つきなどの行事に家族を招待すると、大勢が参加され、餅をついたり、運営に協力してくれる。その際、家族同士も交流している。職員についての苦情には直ちに改善し、納得してもらっている。</p>
重点項目④	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>散歩や買い物に出かけるとき、また地域の人が散歩や犬の散歩で事業所前を通るとき、お互いに挨拶や会話を楽しんでいる。隣の中学校とは運動会に招待されたり、中学生のマラソンを長時間応援したり、散歩のついでに中学校の花壇で休憩したり等々、自然な交流ができています。幼稚園とも運動会や発表会を見に行ったり、ホームに遊びにきてくれたりして交流している。園児がつくった大きなトトロをいただいて廊下に飾っている。</p>

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	法人の理念を踏まえて、グループホームひだまりの理念として、「一緒に笑い、一緒に楽しみ、一緒に過ごす、もう一つの我が家」を掲げている。パンフレットに明記している。ホーム長は職員にたいしてプチホテルひだまりのホテルマンを目指して「気配りともてなし」を求めている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	管理者は職員に対して、ケアの原則を明記し、自然統合、人間統合、地域統合を目標とするべく、明文化したものでグループホームケアの啓発を行っている。職員への理念の浸透は繰り返し行い、家族にも面会等のときに、自分たちの目指すことを話し、理解を図っている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	散歩や買い物に出かけるとき、また地域の人が散歩や犬の散歩で事業所前を通るとき、お互いに挨拶や会話を楽しんでいる。隣の中学校とは運動会に招待されたり、中学生のマラソンを長時間応援したり、散歩のついでに中学校の花壇で休憩したり等々、自然な交流ができています。保育園の運動会や発表会を見に行き、交流している。園児がつくった大きなトロをいただいて廊下に飾っている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	今回の評価にあたって、自己評価を職員全員が行っている。自己評価をじっくり進めることによって、職員の評価に対する理解が深まり、サービスの質の向上の意識が高まっている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	要綱があり、利用者、家族、自治会会長代理、民生委員、城陽市高齢介護課、地域包括支援センター職員がメンバーとなり、2カ月に1回開催され、詳細な議事録が残されている。ホームからはオープンに情報を報告し、メンバーがそれぞれの立場から発言され、ホームとの良い関係づくりが進んでいる、欠席者には広報誌とともに議事録を送付している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市とは開設にあたって種々の相談をしている。市の民生委員が見学きたときは、認知症やグループホームについて理解を図るために説明をしている。介護相談、認知症理解のための講演会、研修会等、事業所としての思いはあるが、現在取り組めていない。	○	事業所の地域貢献として、地域の人の介護相談にのったり、認知症について理解を深めるための講演会、キャラバンメイトの研修会等々を、市との協力で開催し、講師としての役割を果たすことが望まれる。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	多い人は隔日に、少ない人でも月に1回は家族の面会があるので、その際に情報交換している。字が大きく、写真がいっぱい掲載されている広報誌は2カ月ごとに発行し、家族に渡している。管理者は家族も一緒に温泉に行きたいと、家族との関係づくりを力を入れている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	夏祭りや餅つきなどの行事に家族を招待すると、大勢が参加され、餅をついたり、運営に協力してくれる。その際、家族同士も交流している。職員についての苦情には直ちに改善し、納得してもらっている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	利用者とのなじみの関係が大事なので、職員は3年間は異動しないようにと考えているが、法人としての明文化された方針はない。開設1年で法人内異動は1人、その職員はその後ホームに遊びに来ている。採用の要件は何より人柄と考えている。職員のストレス対策としては、個人的にじっくり話を聞くこと、忘年会などで自由に話ができる雰囲気をつくっている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修、外部研修等が実施されており、認知症ケア、緊急時対応、感染症、食品衛生、身体拘束、虐待等のテーマで受講されている。レポートが残され、伝達研修も行っている。職員の資格取得への意欲にたいしては勉強会の実施、シフトの配慮、資格手当ての支給などで支援している。一人ひとりの職員の課題については年2回、管理者と話し合っているが、まだまだ不十分だと考えている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	開設に際して管理者は京都府内のグループホームやデイサービスをいくつか見学している。開設後は取り組めていない。	○	管理者のみならず、職員にも他のグループホームを見学し、一緒に何時間かを過ごしたり、他のグループホームの職員と親しくなり、情報交換するなどが求められる。そのことがグループホームのサービスの改善につながる面は大きいと思われる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	併設特養のショート利用者やデイサービスの利用者が入居される場合もあり、初めての人もふくめていずれも利用者と家族に見学に来てもらっている。利用が始まると、職員がなるべく寄り添っているようにし、馴染んでもらっている。空室があるため、体験入所制度を始めており、その後利用を決めた人もいる。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は利用者を人生の先輩として対応し、いろいろ教えてもらっている。来客への接待の仕方、お茶の師範をもっている利用者にお手前を、着物の着付け、料理の味付け等々、利用者から教わることは多い。		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の個人情報、身体状況、家族状況、医療情報、薬情報、看護サマリー、利用していた介護サービスの情報等々を収集している。簡単な生活歴と利用開始直前の生活状況、趣味等は記録に残されている。	○	利用者の生涯の残りの日々をグループホームで支援していくためには、利用者がどんな生活を送ってきたのか、どんな趣味をもっていたのか、どんな友だちがいたのか等々について、なるべく多くの情報を得ることにより、生きがいのある毎日を支援することが望まれる。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	利用開始前にはケアマネジャーが訪問面接し、医療・介護の情報と利用者や家族の意向を聴き、アセスメントを行っている。1週間ほどの観察の後、医師の意見も入れて暫定介護計画を作成している。さらに職員の意見を入れたのち、家族に同意をとっている。国鉄勤務だった利用者には電車にのることなど、なるべく個別具体的な介護計画にしたいという思いはある。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	状態変化がない場合も1カ月～3カ月で介護計画の見直しを検討している。モニタリングは「実行確認」、「利用者・家族の要望」、「ニーズ満足度」等の項目で毎月おこなっているが、介護計画にそったものではない。ケース記録は利用者の行動など日記的な内容と申し送りの内容であり、介護計画に沿ったものではない。	○	利用者の毎日のケース記録は介護計画の項目にそって、実施したのかどうか、実施した結果利用者の表情や発言、実施できなかった場合はその理由等、介護職員の観察と考察を記録することが望まれる。このことがモニタリングにつながり、次の介護計画に生かされるものである。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	併設特養で毎月実施されているお茶会に利用者は喜んで参加し、そこで交流している。また特養の看護師に管理者や職員が相談している。利用者の行きつけの町の理容店、美容店に同行し、コーヒーを出していただけるので、利用者はお気に入りである。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医への受診同行は介護にとって重要なことと考え、ケアマネジャーを中心に力を入れている。家族が連れて行く場合はケース記録をわたして、医師と家族に見てもらい、結果を聞いている。歯科医にも同行しており、利用者の口腔ケアは声かけし、つきそって行っている。認知症専門医との連携が期待される。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	管理者は特養でのターミナルケアの数件の経験があり、グループホームでも最期までお世話したいという思いをもっているが、明文化された方針はない。職員との話し合いも利用者や家族の意向確認もまだ取り組めていない。	○	ターミナルケアについての取り組みは今後にゆだねられる。職員との十分な話し合い、医療連携の確立等が急がれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	居室は施錠できるようになっており、鍵をかけている利用者もいる。トイレもなかから鍵をかける人もいる。緊急時等には職員がマスターキーをもっている。トイレ誘導等の声かけは十分注意している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝食8時、夕食6時等、一応の日課は決まっているが、起床や就寝は利用者の自由である。9時ごろまで居間でテレビを見ている人もいる。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は特養のものや利用者の希望などで決めている。隔日に利用者とともに食材の買い物に行き、下ごしらえ、盛り付け、配膳等、利用者とともにやっている。仕出し屋だった利用者は味付け等で力を発揮している。昔ながらの和風献立で野菜が多く、季節感もある。時にはテラスで焼肉をしたり、湯豆腐なども楽しんでいる。おやつの手作りも盛んである。外食は毎月出かけ、バスのお迎えに利用者は旅行気分を楽しんでいる。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴は少なくとも週2回を目標にし、希望者には毎日でも支援している。時間帯も希望にそって、午前、午後など、いろいろである。ゆず風呂を楽しむこともある。マンツーマンの同性介助である。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	毎日の食事づくりは盛り付け、配膳等、男性もふくめて喜んで行っている。掃除、洗濯物干し、洗濯物たたみなどもしている。畑仕事の好きな利用者がチューリップの球根をたくさん植えた。特養の毎月のお茶会は楽しみであり、初釜はグループホームで行い、利用者に指導を受けた。折り紙でお雛さまをつくったり、牛乳パックでつくった椅子に紐編みでカバーをつくったり、書道、手芸等を楽しんでいる。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	散歩は毎日、食材や利用者個人の買いたいものなどの買い物は交代で隔日に行っている。そのついでにたこ焼きを食べて帰ることも楽しみである。初詣、節分参り、花見、新緑見物、紅葉狩り等々の季節のお出かけ、外食は毎月行っている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	ホームの近辺は車の往来は少なく、人通りもあまりないところであるが、時にはスピードを出した車が来ることがあり、また地域にはまだあまり知られていないということで、門扉が施錠されている。玄関ドアはチャイムがあり、勝手口や居間からのテラス等々、敷地内にはどこからでも自由に出ることができる。	○	利用者には閉じ込められていると認識している人があり、認知症の利用者にとっての閉塞感が及ぼすダメージを十分考慮して、日中は門扉を施錠しない工夫が求められる。
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	消火器、感知器、通報機、スプリンクラーが設置されており、消防計画がある。防火管理者がいる。備蓄の準備と地域との災害時の協力体制について話し合うことが期待される。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	併設の特養の管理栄養士が立てる献立を使っているため、カロリー値、栄養バランスについては点検されている。利用者の食事摂取量と水分摂取量の記録が残されている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	敷地内の畑は利用者の楽しみであり、また芝生にベンチと椅子を置き、日光浴やお茶をしている。1階の居間の外にはテラスがあり、お茶の木からお茶の葉を摘み、新茶を飲んでいる。門扉から玄関までにはプランターに花を植え、玄関には花が生けられている。居間は明るく、ゆったりとしており、ソファにはユリの花の刺繍の布がかけられている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には洗面台とクローゼットが備え付けられている。利用者は整理たんす、ベッド、椅子、衣装掛け、仏壇、テレビ等を持ち込んでいる。畳を敷いてホームこたつを置いている人もいる。壁にはカレンダー、家族や自分の写真を飾っている。氷川きよしのポスターを壁中に貼っている人もいる。		